
君と夏休み

上月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と夏休み

【Nコード】

N8199S

【作者名】

上月茉莉

【あらすじ】

僕は親友を誘って、街にあると言つ宝探しを始めた。

僕のひいじいちゃんのひいじいちゃん辺りの時代に、王様が残した凄い宝があるらしい。それはどうも、そこいらで働いている人が一生働いた金額の五倍以上、と噂されていた。

その宝がどうやら僕の街にあるらしい。正しく言うと、街にたくさんある洞窟のどこかにらしい。文献から判った事だったが、国のお偉いさんは見てない宝の中身を勝手に想像して、価値の低い宝だと決め付けてこの話を放っていた。

当然、街はトレジャーハンターでいっぱいになった。街の人もお宝探しに血眼になって、僕の隣の家のおじちゃんの仕事は休み、アテもないこの話に夢中になってしまったらしい。

僕も街の人と同じように、いや、街の空気に吞まれて宝探しをする事にした。僕は軽い冒険心からだし、長期休みの暇つぶしになればそれで良かったから、親友を誘っての冒険となった。

彼は街一番の悪ガキで僕とは正反対の性格をしているが、それでも不思議と気が合った。どれだけ悪ガキかと言うと、言う事は大半が嘘で、教会のキリスト像の持つ杖を、使わなくなった机の脚にすり替えてしまったりと、武勇伝の多いとんでもないヤツだ。

大人は成績優秀な僕が彼とつるむ事に反対する。けれど彼が僕の親友である事は変わらなかった。

彼と待ち合わせた場所で約束の時間に30分遅れたが会う事が出来た。ひねくれ者の彼はまだ午前中だと言うのに、こんばんは、と挨拶した。僕はそんな彼には慣れっこだったので、おはようと普通に返す。

他愛もない雑談をしていたら、街外れの洞窟の集まった広場にたどり着いた。

「あっという間だったね」

隣に居る彼が言った。判っているが何を言う。2時間掛かったじやないか。

「そうだね」

僕は長距離の疲れからか気のない返事をし、辺りを見回した。居るわ居るわ宝探し目当ての人。みんな、僕みたいに暇なんだろうか。取り敢えず彼を連れて、目に付いた近くの洞窟を探すとする。王の遺産なんて無さそうなただの洞窟だったが、大して問題ではなかった。

洞窟は思ったよりジメジメとしていて暗かった。僕は彼の言う冗談に喉を鳴らして笑う。そうしている間に広間に出たのだった。地面を見渡しても何も見付からない。

「狭いねー」

彼が言った広間は広かった。僕は自然彼と離れ単独行動をし、広間を見ていく。

広間の死角になる位置を何気なく見て僕はドキツとした。理由は簡単だ。そこには、天然の洞窟なのに明らかに人工物の扉があった。手を伸ばしてそれを確かめる。ひんやりとした。

そして古典に使われる様な文字で何か書いてあった。扉を開く方法か何かかもしれない。何にせよ手掛かりだろう。遺産だとか堂々と判る様な表札はまさか掲げていないだろう。

「なー行こうよー」

僕がその扉を観察していると、広間の方から彼の声が聞こえて僕はびくつと身体を震わす。

「い、今行くよ」

震えそうになる声を抑えて返事をした。

何故僕は彼にこの発見を言わなかったか。理由としては簡単な物だった。見つけられるかもしれない宝を独り占めしたかったんだ。

広間で待つ彼と何食わぬ顔で合流をして、この洞窟には何もないと結論を付け、二人で洞窟を後にする事にした。

帰路、僕は大きく口を利かなかった。聞かれた事には当たり障り

無く返すが、自分からは進んで話を振らなかつた。違つ事を考えていたから。

洞窟を出て僕は言った。

「君、君は他のトレージャーハンターに、ここに宝が無い事を教えてあげなよ」

「構うけど、何で？」

当然の反応が返つて来る。僕は柔らかい笑みを浮かべた。

「こんな馬鹿げた騒ぎ、長期休み中に終わらせたいじゃないか。だから効率を良くする為さ。それに、君が親切な行いしたら君の株も上がるよ」

彼は僕の言葉に納得した様で仕切りに判つたと頷いていた。

翌日から僕と彼は別行動だった。そもそも暇を潰せたら良いだけの気持ちだったので、彼からの反対も無い。

彼は昨日の打ち合わせ通りあそこに宝が無いと言い回る。僕はその間、他の洞窟を探す振りをして図書館に行つて、模写した文の解読を進めていた。

「あそこには宝があるのさ、本当だよ」

街中の人に彼の狼少年つぷりは響いていた事もあつて、まさか子供の僕らが（正確には僕だけだけど）宝を見付けたとは誰も考えていないから、彼の言葉は有り難うと言う偽善的な礼を言わせると共に、あそこに宝の無い事を根深くトレージャーハンターに伝える事になった。

「川近くの洞窟、あそこにも無かつたよ」

僕はさも探索をしたみたいなお口振りで彼に事実を教える。

「そうかい。みんなに伝えなくておよくよ」

彼は機嫌が良さそうに返した。教えてくれた礼にと大人は子供の彼を甘く見て、高いお菓子や珍しいお菓子を渡しては自分の優しさに陶醉するのだ。

解読も終盤。

どうも扉の文字は宝物庫だと知らせ、ごく丁寧に扉の開け方まで書

かれた親切な物だった。全く、賊が偶然見たらどうすると言っただろう。当時の王様は呆れる程牧歌的だったらしい。

一方、彼の働きである洞窟や近くの洞窟には人が近付かなくなり閑散としていた。休みが終わりなのも飽き性な人が減った理由の一つだろう。

彼もその頃には多数の人間と同じように宝探し自体に飽きていたから、花火でもしようよ、と洞窟の近くに僕を誘う。虫の鳴き声が暑苦しく感じる夜の事だった。

彼と並んで谷の近くを通り、誰も居ない洞窟へと寄る。こんな人気の無い所なら、幾らはしゃいでも誰も文句は言わないだろう。僕はわくわくした。

途端彼が足を止めて振り返る。

「お前、僕を騙していただろう」

言葉とは裏腹に彼の表情は穏やかだった。僕は一瞬焦った。けど嘘は吐き通すと真実になる事を知っている僕は、首を横に振る。

「騙す？ とんでもない。大体何の話だい」

「嘘だ！」

穏やかだった彼の表情が見る間に険しくなっていく。

「君の態度は不自然だった！ だから僕は何かがおかしいと気付いた。それで見つけたんだよ、扉を！」

言い逃れの出来ない状況。宝は山分けか、と諦めた僕は小声で先程否定した事実を肯定した。

「……君の推測通りさ」

一瞬場が静まり返った。多分、僕の嚙下音が彼に聞こえていたと思う。

「僕を……騙すつもりだったのか？」

何故だか泣きそうに歪んだ表情を浮かべて彼が聞く。僕は慌てて首を横に振った。

「……君は正直な嘘つきだから、そこだけは利用したさ」

素直に話す。

彼はとうとう泣き出してしまった。理由の判らない僕はおどおどしていたと思う。

彼が夜に消え入りそうな程小声で呟いた。

「僕は君だけは信じていたんだ。隠し事なんてしない仲だと思ってた！」

この時の彼の気持ちは判らない。推測すればそれはきつと裏切りや利用されたと言う悲しみ、そして誰も居ないと言う悪魔の囁き、宝の独占。

彼がいきなり大声を上げた。慟哭。僕はそう思った。

次の瞬間、僕は彼に勢い良く身体を突き飛ばされていた。襲われる浮遊感、無くなった足場、落下。次の瞬間から僕は何も考えられなくなっていた。

風の噂が入り、宝は彼が発掘したのだと伝わってきた。今では裕福で、きつとステーキなんかを食べている日々なんだろう。「ねえ、貴方は彼の行方を知っているの？」

彼の家での晩餐の時だった。母親が彼に聞いた。暫くの間後に彼は答えた。

「……知らないよ」

天の邪鬼な彼とて家族に対して常に嘘ばかりでもないし、質問も質問だったので誰もこれが嘘だったとは思わなかった。

嘘の真実、だった。

真実を誰も知らない現状。僕はただ虚空を見つめながら思っていた。

裏切ったのは僕だったのか、彼だったのか、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8199s/>

君と夏休み

2011年4月29日01時25分発行